

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：12102
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2018～2022
 課題番号：18K03058
 研究課題名(和文) 親の能動的・反応的攻撃性が虐待的養育と子どもの心理社会的不適応に及ぼす影響

 研究課題名(英文) The effect of parents' proactive & reactive aggressiveness on children's socio-psychological maladjustment

 研究代表者
 濱口 佳和 (Hamaguchi, Yoshikazu)

 筑波大学・人間系・教授

 研究者番号：20272289
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究1では、小学生の保護者用の自記式養育行動尺度を新たに作成し、因子構造と高い信頼性・妥当性を明らかにした。研究2・3では日本版RPQを作成した。大学生・高校生を対象に、能動的攻撃、反応的攻撃の2因子構造と高い信頼性・妥当性を実証した。研究4では大学生用の自記式能動的・反応的攻撃性尺度を小学生の保護者を対象に適用可能であることを確認した後、研究5で、親の能動的・反応的攻撃性、共感性、攻撃的行動傾向が、肯定的養育行動・否定的養育行動を媒介して子どもの攻撃行動と内在化問題に関連を示すことを横断的研究デザインで明らかにし、研究6では、1年後の影響を縦断的研究デザインで検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第1に、小学生を持つ親の養育行動を、肯定的・否定的両面から網羅的に測定できる高い信頼性・妥当性を誇る尺度を開発した点である。この尺度により、子どもの攻撃行動の40～45%の分散が説明可能で、特に否定的養育行動の説明力は高く、親の虐待的養育のスクリーニングにも使用可能である。第2に、親の攻撃性、特にこれまで注目されてこなかった能動的攻撃性が、不適切な罰・感情的叱責と強い関連を示し、虐待的養育の危険因子であることを、縦断的研究デザインで示した点である。第3に、親の共感性は、肯定的養育を媒介して子どもの攻撃性を低下させる保護要因として機能することを縦断的研究デザインで示した点である。

研究成果の概要(英文)：In Study 1, a new self-administered child-rearing behavior scale for parents of elementary school children was created, and its factor structure and high reliability and validity were clarified. In Studies 2 and 3, a Japanese version of the RPQ was created. The two-factor structure and high reliability and validity of proactive and reactive aggression were demonstrated for college and high school students. After confirming the applicability of the self-administered proactive and reactive aggression scale for college students to parents of elementary school students in Study 4, Study 5 demonstrated that parental proactive and reactive aggression, empathy, and aggressive behavior tendencies show associations with children's aggressive behavior and internalizing problems mediated by positive and negative parenting behaviors in a cross-sectional study design, and Study 6 examined the effects one year later in a longitudinal study design.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：親 能動的・反応的攻撃性 肯定的・否定的養育行動 小学生 共感性 身体的攻撃 関係性攻撃 縦断的研究

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、小学生の親の虐待的養育が子どもに与える影響を明らかにするとともに、虐待的養育に関連する親の攻撃性の影響を検討することであった。研究開始当初は、以下の状況であった。

子どもの外在化問題(主に攻撃行動)・内在化問題に対する説明力の高い養育行動尺度の開発が十分ではない。子どもの攻撃行動を能動的・反応的の2時限で測定できる国際通用性の高い自記式尺度の日本語版がない。国際通用性のある親の攻撃性のどの側面が特に虐待的養育に関連するのか、能動的・反応的攻撃の観点から縦断的研究デザインで解明されたものはない。

2. 研究の目的

本研究では、以下のことが目的とされた。小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)を作成し、因子構造、信頼性・妥当性を検証すること。日本語版 RPQ を作成し、高校生・大学生サンプルを対象に、その因子構造を明らかにするとともに、信頼性・妥当性を検証すること。親の攻撃性が養育行動を媒介して児童の攻撃的行動傾向の形成に関連を示すことを横断的デザインと縦断的デザインで実証的に検討すること。

3. 研究の方法

すべて質問紙を用いた方法で行った。

4. 研究成果

研究1 小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)の作成

小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)を作成し、因子構造、信頼性・妥当性を検証することを目的とした。小学生をもつ全国の保護者 1019 名(父 535 名, 母 484 名)を対象に、Web 調査を実施した。調査内容は、調査対象者の属性と子ども・配偶者・その他の同居者に関する質問、

小学生保護者用養育行動尺度改訂版原版(72 項目:肯定的養育行動 52 項目,否定的養育行動 20 項目,5 件法)、親の養育行動を測定する他 2 種類の尺度(FDT19 項目,PNPS35 項目)、

CBCL 抑うつ・不安尺度 16 項目、CSBS-P、身体的攻撃、関係性攻撃、向社会的行動(各 5 項目,計 15 項目)であった。分析の結果、肯定的養育行動については、「自律性促進」「暖かい関与」「友好的交流」「冷静な叱責」の 4 因子、否定的養育行動については、「不適切な罰」「感情的叱責」「過剰な許容」の 3 因子が抽出され、下位尺度が構成された。係数は肯定的養育行動 4 尺度で.79~.93、否定的養育行動 3 尺度で.79~.88 となり、高い信頼性が得られた。伊藤他(2014)の肯定的・否定的養育行動尺度との相関を検討したところ、本研究の肯定的養育行動 4 尺度は、伊藤他(2014)の肯定的養育 3 尺度(関与、肯定的応答、意思尊重)と.47~.75(M = .58)の相関があった。また、本研究の否定的養育行動 3 尺度は、伊藤他(2014)の否定的養育 3 尺度(過干渉、非一貫性、叱責・体罰)と.16~.71(M = .47)の相関があった。以上より、この尺度は、良好な因子的妥当性と併存的妥当性を備えていることが明らかになった。

濱口佳和・廣瀬愛希子・金子楓(2021). 父母の虐待的養育行動が児童の社会的行動に及ぼす影響

1 小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)「肯定的養育行動尺度」の構成 日本教育心理学会第 63 回総会発表論文集

桑原千明・濱口佳和(2021). 父母の虐待的養育行動が児童の社会的行動に及ぼす影響 2 - 小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)「否定的養育行動尺度」の構成 日本教育心理学会第 63 回総会発表論文集

濱口佳和(2021). 小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)の妥当性の検討 併存的妥当性並びに因子的妥当性について 日本カウンセリング学会第 54 回大会発表論文集

研究2 日本語版 RPQ の作成(高校生サンプル)

日本語版 RPQ を作成し、高校生サンプルを対象に、その因子構造を明らかにするとともに、信頼性・妥当性を検証することを目的とした。調査対象者は民間調査会社にモニター登録をしている全国の高校生(15 歳~18 歳)200 名(男 100 名, 女 100 名)であった。調査内容は、日本版 RPQ(23 項目)、HAI: 敵意(10 項目)、身体的攻撃(10 項目)、言語的攻撃(8 項目)、関係性攻撃傾向尺度(櫻井他, 2005)(13 項目)、SDQ(Goodman, 1997): 情緒問題(6 項目)、行動問題(4

項目),向社会的行動(5項目) 青年用主張性尺度(柴橋,2001)限界と喜びの表明(8項目)、
多次元共感尺度(登張,2003)共感的関心(13項目),気持ちの想像(5項目)、非行接近・回避
尺度(近藤,2004):自己中心性(6項目),刺激興奮性(6項目),罰回避(4項目),罰感受性(4項目),
抑制性(4項目)、非行行動欲求(15項目):非行行動をやりたいという欲求の強さ(6件法)人の
ものを盗む,持ち物を勝手に使う,持ち物を隠す・こわす,嫌がることを脅して無理にさせる,
お金や持ち物を取り上げる,乱暴なことをする,無視したり仲間外れをする,悪口や秘密を言い
ふらす,騒いで授業の邪魔をする,お金を払わず店から品物を持ってくる,わざと学校の建物・
備品を壊す,弱いものに嫌がらせをする,人の自転車に黙って乗る 等: 非行行動実行(9項目)
実際にやった・やっていない

(3)実施時期:2021年3月

(結果と考察)

(1)尺度構成:

探索的因子分析:日本版RPQ全23項目に対し,抽出因子数2を指定して,最尤法・プロマ
ックス回転の探索的因子分析実施.初期の固有値は9.24,2.31,寄与率40.18,10.05.第1因子
「P11_けんかでするために,武器を持ち歩いたことがある(.96)」「P9_ふざけていやらしいた
ずら電話をかけたことがある(.90)」等,日本版RPQ原版の能動的攻撃尺度の項目に高い因子負
荷量⇒「能動的攻撃」因子と解釈.第2因子「R2_他の人にイライラさせられて,怒って反応し
たことがある(.72)」

「R4_かんしゃくを起こしたことがある(.70)」等,RPQ原版の反応的攻撃尺度の項目に高い因
子負荷量⇒「反応的攻撃」因子と解釈.想定された2因子が抽出されたが、「たたいた」「どな
ったら気分がよくなった」といった記述を含む項目など4項目が能動的攻撃の因子に低いなが
らも.40~.50の因子負荷量を示し、「ゲームに負けてひどく腹を立てる」がどちらにも高い因子
負荷量を示さないなど,反応的攻撃の半数近くの項目で想定外の結果となった.これらの項目は,
日本の高校生サンプルで反応的攻撃の項目としては適合しない可能性が示唆された.RPQの能
動的攻撃については原版通りの12項目を,反応的攻撃については第2因子に対して.40以上の
因子負荷量を示した6項目を,各下位尺度の構成項目とした.能動的攻撃尺度は $\alpha = .92$, $M=1.19$,
 $SD=3.04$. 反応的攻撃は $\alpha = .80$, $M=3.06$, $SD=2.65$. 2下位尺度間相関は $r = .54$. 性差をt検定
で検討したところ,いずれの尺度も有意差なかった.

(2)妥当性の検討:

能動的攻撃・反応的攻撃とも身体的攻撃,言語的攻撃,反社会的行動欲求・実行,行為問題と
正の有意相関⇒Smeets, et al(2017)オランダの青年と同様の結果.

能動的攻撃は,非行接近尺度と正の相関,反社会的行動欲求と高い正の相関⇒能動的攻撃が特
に非行・反社会性と強い関連があることは多くの先行研究同様の結果(Pechorro, et al,
2017;Raine,et al,2006 他)

反応的攻撃尺度は,敵意と情緒的問題との間に正の有意相関(能動的攻撃は ns)⇒反応的攻
撃が特異的に内在化問題と関連することは,多くの先行研究と同様(Raine, et
al.2006;Seah&Ang, 2008 他)

反応的攻撃には,関係性攻撃と無相関であるに典型的に表れているように,怒りの表出の項目
が殆どで,攻撃行動の要素が不足しているのではないか?内容的妥当性をさらに検討す
べき.

濱口佳和・渡邊健蔵(2021). 日本語版 Reactive-Proactive Aggression 質問紙(RPQ)の作成 1—高
校生サンプルの因子パターン 日本心理学会第85回大会発表抄録

渡邊健蔵・濱口佳和(2021).日本語版 Reactive-Proactive Aggression 質問紙(RPQ)の作成 2—高校生サンプルによる妥当性の検討 - 日本心理学会第 85 回大会発表抄録

研究 3 日本語版 RPQ の作成 (大学生サンプル)

日本語版 RPQ を作成し、大学生サンプルを対象に、その因子構造を明らかにするとともに、信頼性・妥当性を検討した。関東の 1 国立大学の学生 206 名(男 111 名, 女 95 名)を対象に、日本語版 RPQ(23 項目)と日本語版 BAQ 身体的攻撃(6 項目)、同敵意(6 項目)、同短気(5 項目)など妥当性検証のための諸尺度を合わせて実施した。全 23 項目について最尤法プロマックス回転による因子分析を実施。スクリー基準から 2 因子解を採択。第 1 因子(抽出後の負荷量平方和 = 6.99)は「能動的攻撃性」、第 2 因子(抽出後の負荷量平方和 = 1.91)は、反応的攻撃性の因子と解釈された(能動的攻撃性(12 項目) = .88, $M=1.57$, $SD=2.97$; 反応的攻撃性(5 項目) = .78, $M=3.55$, $SD=2.12$)。能動的攻撃は男の方が女より優位に高かった($t(155.58)=3.384$; 男 1.89, 女 0.69)。反応的攻撃と能動的攻撃の相関は $r=.35$ ($p<.001$)と先行研究よりやや低めであった。日本語版 RPQ の反応的攻撃尺度は、身体的攻撃(.35)、言語的攻撃(.52)、関係性攻撃(.48)と低～中程度の有意相関があった。また、日本語版 RPQ の能動的攻撃尺度は、身体的攻撃(.26)、言語的攻撃(.28)、関係性攻撃(.25)と有意相関があり、DTDD マキャベリズム尺度とは.48、同ナルシシズム尺度とは.25、一次性サイコパシーとは.34 の有意相関が見られた。SPRAS-U の能動的攻撃性全尺度と.29~.38 の有意相関がある一方で、反応的攻撃性の全尺度とも.34~.49 の有意相関が見られた。

研究 4 自記式能動的・反応的攻撃性尺度(大学生用)の成人サンプルへの適用 : 小学生の父母への適用

大学生を対象に開発された自記式能動的・反応的攻撃性尺度(大学生用)(SPRAS-U)(濱口,2017)を、小学生の親(父母)に対して適用し、因子構造の検討、下位尺度の構成と信頼性・妥当性の検討を行った。全国の小学生の子どもの親 656 名(父 320, 母 336)を対象に Web 調査を実施した。探索的因子分析の結果、SPRAS-U 全 57 項目で最終的に 6 因子が抽出された。.40 以上の因子負荷量を持った項目から各下位尺度を構成。信頼性は.74~.94 と押しなべて高く、すべての尺度が 3 種の攻撃行動と正の有意相関を示した。怒り、報復意図、外責的認知は敵意と比較的高い正の相関を示し、攻撃有能感と自己中心性は共感的関心と中程度の負の相関を示す等、併存的・弁別的妥当性が実証された。

濱口佳和・渡邊健蔵(2022). 自記式能動的・反応的攻撃性尺度(大学生用)の成人サンプルへの適用 - 小学生の父母への適用 - 日本学校心理学会第 24 回大会発表抄録

研究 5 小学生の親の能動的・反応的攻撃性・共感性・養育行動と子どもの社会的行動・抑うつとの関連の検討

親の攻撃性が養育行動を媒介して児童の攻撃的行動傾向の形成に関連を示すことを横断的デザインで実証的に検討することである。本研究では、親の能動的・反応的攻撃性は、子育てにおける養育行動を規定すると予測する。親の攻撃性は、子どもに対する怒りを含んだ叱責や懲罰、力で一方的に支配しようとする否定的な養育行動を促進し、逆に子どもに暖かく接し、楽しく友好的に関わり、自律性を尊重しながら導くといった肯定的な養育行動を抑制すると考えられる。調査対象者は日本全国の小学生の親 411 名(母 209, 父 202)。調査内容は、人口統計学的変数親の性別、年齢、配偶者の有無、世帯年収等、親の攻撃性 自記式能動的・反応的攻撃性尺度(大学生用, 57 項目, 5 件法)使用。小学生の保護者に対して適用した濱口・渡邊(2022a)に従って尺度構成。共感性 登張(2003)の多次元共感質問紙の共感的関心(13 項目)と気持ちの想像(5 項目)(5 件法)、親の養育行動 小学生保護者用養育行動尺度(肯定的養育行動;自律性支援(11), 暖

かい関与(9), 友好的交流(5), 冷静な叱責(4): 否定的養育行動(不適切な罰(6), 過剰な許容(6), 感情的叱責(4))。5件法。 児童の攻撃行動 CSBS-P 日本語版 (Kawabata, et al., 2010)を使用。 親が子どもの仲間に対するふだんの社会的行動を評定。 身体的攻撃(5), 関係性攻撃(5)5件法。 (3)実施時期は2020年3月。 養育行動と子どもの攻撃行動は攻撃性と共感性の測定約10日後に実施された。 親の能動的・反応的攻撃性と共感性を第1水準, 親の攻撃行動を第2水準, 養育行動(肯定的, 否定的)を第3水準, 児童の攻撃行動を第4水準とするパス解析を, 構造方程式モデリング(親の性別による多母集団同時分析)により実施した。 有意でないパスを削除して, 最終的に配置不変モデルが得られた。 親の能動的攻撃性は否定的養育行動を促進し, 児童の攻撃行動を高めること, 親の反応的攻撃性は親の攻撃行動を促進し, 母親の肯定的養育を抑制することにより児童の攻撃行動を高めること, 親の共感性は肯定的養育を促進し, 児童の攻撃行動を抑制することが示された。

濱口佳和(2022). 親の能動的・反応的攻撃性と共感性が養育行動及び児童の攻撃行動に示す関連性の検討 犯罪心理学研究, 60,特別号, 28-29.

研究6 小学生の親の能動的・反応的攻撃性・共感性・養育行動が1年後の子どもの攻撃行動に及ぼす影響の検討

本研究では, 親の能動的・反応的攻撃性, 攻撃的行動傾向, 共感性, 養育行動が, 1年後の子どもの攻撃行動に及ぼす影響について, 構造方程式モデリングにより検討することを目的とした。(1)調査対象者は, NTT コムオンラインの登録モニターの中から, 小学1年生~6年生までの児童を子どもに持つ親276名(父親140名, 母親136名)。研究5と同じ質問紙でWeb調査によりデータ収集を行った。調査は2021年3月に実施。仮説的モデルを, 構造方程式モデリングで親(父, 母)による多母集団同時分析で検証した。その結果, モデルの適合度は良好(CFI = .919, RMSEA=.061)で, 2021年3月の親の変数(能動的・反応的攻撃性, 共感性, 攻撃行動, 養育行動)により, 2022年3月の児童の攻撃行動の39%(父), 33%(母)が説明されることが明らかになった。特に2021年の否定的養育行動は2022年の児童の攻撃行動に対し, 父母共に正の有意な関連を示し(父.46; 母.34), 2021年の肯定的養育は父母ともに負の有意な関連を示した(父-.20; 母-.23)。2021年の親の能動的・反応的攻撃性も攻撃行動も共に2022年の児童の攻撃行動に対して直接的な影響は示さなかったが, 養育行動を媒介として間接的な効果を示すことが明らかになった(標準化間接効果: 2021年親の能動的攻撃性, 父.251, 母.154; 2021年親の反応的攻撃性, 父.088, 母.0688)。同一モデルを2021年の一時点のデータで分析した濱口(2022)に比して, 特に父親の場合, 児童の攻撃行動のR²と, 否定的養育行動から児童の攻撃行動へのパス係数は減少するが, 1年後でも養育行動による予測力の高さが示された。

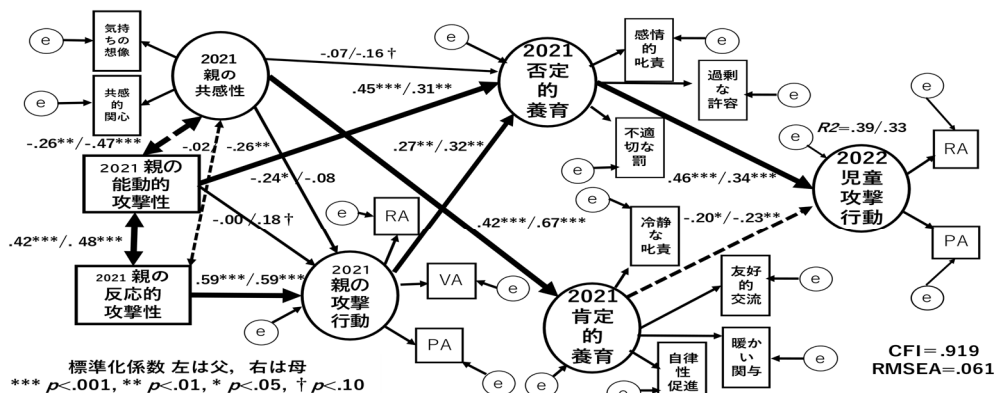


Figure2 親の能動的・反応的攻撃性と共感性が養育行動を1年後の児童の攻撃行動に及ぼす影響

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 渡邊健蔵・堀井俊彰・濱口佳和	4. 巻 61
2. 論文標題 青年期における過去のいじめに関する経験と現在の共感性及び精神的健康との関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 筑波大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 89-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 廣瀬愛希子・濱口佳和	4. 巻 36
2. 論文標題 両親間の葛藤・情緒的交流と子どもの適応との関連の検討：COVID-19の影響の検討もあわせて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達研究：発達科学研究教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 廣瀬愛希子・濱口佳和	4. 巻 92 巻 2 号
2. 論文標題 両親関係の情緒的安定性が青年の適応に与える影響 日本語版SISの作成を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.92.19229	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 廣瀬愛希子・濱口佳和	4. 巻 59
2. 論文標題 子どもから見た両親間のやり取りに関する探索的検討 両親間交流尺度作成の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 筑波大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 37 - 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬愛希子・濱口佳和	4. 巻 93
2. 論文標題 両親関係の情緒的安定性が青年の適応に与える影響 日本語版SISの作成を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 - (早期公開のため)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.92.19229	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金子楓・濱口佳和	4. 巻 68
2. 論文標題 母親のゲートキーピング尺度日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 339 - 350
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/jjep68.339	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 濱口佳和	4. 巻 58
2. 論文標題 能動的・反動的攻撃性と社会的情報処理による関係性挑発場面の応答的行動への因果モデルの検証 青年初期と中期の発達の差異の比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 筑波大学心理学研究	6. 最初と最後の頁 59-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金網祐香・濱口佳和	4. 巻 67
2. 論文標題 攻撃行動に対する中学生の善悪判断と判断に影響を与える要因の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 87-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/JJep.67.87	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 濱口佳和
2. 発表標題 小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)の妥当性の検討 併存的妥当性並びに因子的妥当性について
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第54回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱口佳和・渡邊健蔵
2. 発表標題 小学生の親の能動的・反応的攻撃性と共感性が 養育行動に与える影響の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第 64 回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱口佳和・渡邊健蔵
2. 発表標題 小学生の親の養育行動と児童の社会的行動・抑うつとの関連
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱口佳和
2. 発表標題 親の能動的・反応的攻撃性と共感性が養育行動及び児童の攻撃行動に示す関連性の検討
3. 学会等名 日本犯罪心理学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱口佳和・渡邊健蔵
2. 発表標題 自記式能動的・反応的攻撃性尺度(大学生用)の成人サンプルへの適用 - 小学生の父母への適用 -
3. 学会等名 日本学校心理学会第24回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱口佳和・廣瀬愛希子・金子楓
2. 発表標題 父母の虐待的養育行動が児童の社会的行動に及ぼす影響1—小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)「肯定的養育行動尺度」の構成
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 桑原千明・濱口佳和
2. 発表標題 父母の虐待的養育行動が児童の社会的行動に及ぼす影響2 小学生保護者用養育行動尺度(改訂版)「否定的養育行動尺度」の構成
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金子楓・濱口佳和
2. 発表標題 父母の虐待的養育行動が児童の社会的行動に及ぼす影響3 共分散構造分析による検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 関口雄一・濱口佳和
2. 発表標題 父母の虐待的養育行動が児童の社会的行動に及ぼす影響4 父母の虐待的養育群の児童の社会的行動の特徴
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱口佳和・渡邊健蔵
2. 発表標題 日本語版Reactive-Proactive Aggression質問紙(RPQ)の作成1 高校生サンプルの因子パターン
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊健蔵・濱口佳和
2. 発表標題 日本語版Reactive-Proactive Aggression質問紙(RPQ)の作成2 高校生サンプルによる妥当性の検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱口佳和・金子楓
2. 発表標題 大学生のCyber Aggressionと心理的不適応の関連の検討 1 大学生用Cyber Aggression Scaleの作成
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子楓・濱口佳和
2. 発表標題 大学生のCyber Aggressionと心理的不適応の関連の検討2 能動的・反応的攻撃性および心理的ストレス反応との関連
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬愛希子・濱口佳和
2. 発表標題 小学生保護者用養育行動尺度の構成1：尺度の因子構造の検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣瀬愛希子・濱口佳和
2. 発表標題 小学生保護者用養育行動尺度の構成2：養育行動と心理社会的不適応との関連
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱口佳和
2. 発表標題 児童・青年の攻撃性といじめ
3. 学会等名 日本学校心理学会第21回千葉大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱口佳和
2. 発表標題 大学生の Cyber Aggression と心理的不適応の関連の検討1: 大学生用 Cyber Aggression Scale の作成
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金子楓・濱口佳和
2. 発表標題 大学生の Cyber Aggression と心理的不適応の関連の検討2: 能動的・反応的攻撃性および心理的ストレス反応との関連
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱口佳和
2. 発表標題 小学生保護者用養育行動尺度の構成1: 検証的因子分析と尺度構成
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 広瀬愛希子・濱口佳和
2. 発表標題 小学生保護者用養育行動尺度の構成2: 養育行動と心理社会的不適応との関連
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 濱口佳和	4. 発行年 2022年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 17
3. 書名 公認心理師の基礎と実践18教育・学校心理学第2版「第9章いじめの理解と援助」	

1. 著者名 濱口佳和（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 14
3. 書名 『教育・学校心理学』 第9章 いじめの理解と対応	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	廣瀬 愛希子 (Hirose Akiko)	筑波大学・人間総合科学研究科・大学院生 (12102)	
研究協力者	金子 楓 (Kaneko Kaede)	筑波大学・人間総合科学研究科・大学院生 (12102)	
研究協力者	渡邊 健蔵 (Watanabe Kenzo)	筑波大学・人間総合科学学術院・大学院生 (12102)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	関口 雄一 (Sekiguchi Yuichi)	山形大学・学術研究院・准教授 (11501)	
研究協力者	桑原 千明 (Kuwabara Chiaki)	文教大学・教育学部・准教授 (32408)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関